宮本先生の授業のレジュメを眺めながら

高橋　英海

研究室の発掘調査を行って、二十年余り前の大学院授業のレジュメを掘り当てた。一九九二年から一九九四年にかけて、宮本先生のニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』と『モーセの生涯』の講読授業に出ていた頃のものである。大学院のゼミ形式の授業なので、残っているのは講義ノートや配布資料ではなく、受講生が準備したレジュメだが、その欄外や裡面に多数の手書きのメモがある。時々、囲い文字で「宮」と記して宮本先生の発言だということが明示されているものもあるが、それ以外も多くは学生の発表に対する先生のコメントや説明をメモしたものである。レジュメの裡面には、先生がホワイトボードに描かれたものを写した図もしばしば見出される。

私の、いまよりもさらに稚拙な当時の理解力で宮本先生の発言をどれだけ正確に理解して書き留めているか、はなはだ自信がないが、せっかく見つけたので、そのようなメモをいくつか紹介させていただく。

『雅歌講話』の「プロロゴス」についてのレジュメに記された次のメモは、授業で『雅歌講話』を読み始めたばかりの頃のものと思われる。

雅歌注解の目的 — ἀρετή、建徳、cf.『モーセの生涯』の副題

ギリシア語の語源 — 卓越性、力量、cf. ギリシアの彫刻、英雄

プラトン — δικαιοσύνη, ἀνδρεια, σωφροσύνη etc.

グレゴリオス — 無限者を相手にして、自分の無限のエネルギーを完成させていく

有徳な生のあり方について説く『雅歌講話』を読み始めるにあたって、ホメロスをはじめとする古典期のギリシア文学やプラトンにおける「徳」の概念とグレゴリオスらの教父たちにおける「徳」の概念の違いについて宮本先生が説明された際の話をごく簡略化して記したメモだが、私にとっては、このメモはギリシアの古典の伝統を受け継ぎな

がらも、まったく新たな思想を繰り広げたキリスト教の教父たちの世界へと自分が引き込まれていった瞬間の記録でもある。

レジュメのメモには、ニュッサのグレゴリオスの思想において中心的な位置を占める「エペクタシス」の概念に関わる説明がしばしば現れる。

πέρας、境界、限界（一つの完全性）が → ἀρχή（出発点、根底、原理）となる。πέρας を ἀρχή とする力（δύναμις）は言葉（ロゴス）から来る。

『モーセの生涯』を読んでいた頃のレジュメには次のようなメモもある。

質料的生（ὑλάδης βίος）

ἐπιθυμία が質料（非存在・虚偽）に向かったとき、満たされたように思われるが、実際には満たされていない。それ故にさらに求めるが、満たされない。

↓循環

↓無内容になる、「やせる」、cf. Narcissus、人間存在そのものが虚しくなる。

ἐπέκτασις —（無限である）存在、実体のあるものに ἐπιθυμία が向かったときは真に満たされる

↓「太る」、cf. 年輪（◎）。容量 capacity が増える。

無限に。

↓徳 —↓徳 —↓徳 —↓徳 —↓徳 —……徳・キリスト

「質料的な生」を送る者と「エペクタシス」の道を歩む者を対比させた説明だが、ここで、虚無の方を向いて無化していく者の喩えとして、水に映った自分の姿に見とれて、やせ細って死んでしまったナルキッソスの話が出てくるのは宮本先生のオリジナルだろうか。また、「年輪」という言葉の次にある丸（活字では二重丸しか出せないが、実際のメモには五重の丸が描いてある）は、先生が年輪の絵をホワイトボードに描いたのを写したものだと思われる。ともに、宮本先生らしい、印象に残る喩えである。

ここでその内容を逐一再現することはできないが、レジュメに記されたメモには、ニュッサのグレゴリオス自身やその他の教父、聖書の箇所への言及のほかに、プラトン、アリストテレスの諸作品はもとより、古代ではプロティノ

スやフィロン、中世ではアクイナス、エックハルト、近代ではブーバー、レヴィナスといった思想家たちの名が散りばめられている。そのような先生の思想世界の広がりと同時に宮本先生の授業で印象に残るのは言語というものに対する拘りである。先生の言語への関心が駄洒落という形で表現されることもしばしばあったことは先生をご存じの方々には容易に想像していただけるものと思う（ただし、その頻度は当時の授業の方が最近と比べると低かった気がする）。いま、レジュメの記録からは確認できないが、日本語の「ことば」が「こと（事）」の「は（端）」であるのと同様に、ヘブライ語の「ダーバール」も「事」という意味が根底にあるという話は先生の授業の中で毎年少なくとも一度は聞いていたように記憶している。

先生がギリシア語動詞の中動態に関心を抱いていたことも思い出されるが、手元のメモには次のようなものがある。

ἀποφαίνεσθαι について

きこえる、みえる — 主体と対象が articulate されていない、主体と客体を分割できない世界。自ら、自ずから……

「古池や……」— 芭蕉が主体として聞いているのではない。

日の丸の白と赤が共鳴している世界

ギリシア語の中動態に芭蕉の世界に見られるような日本的な感覚と共鳴するものを見出しているのも宮本先生らしい。

そもそも旧約聖書に収録された恋愛の歌についての注解である『雅歌講話』の講読授業では「愛」についての話もしばしばあった。本来は違う次元での愛の話なのだが、授業に出ていた当時結婚を目前にしていた身としては、次のようなメモとして記録された話が記憶に残る。

ἀγάπη による接触。理性による把握はできない、拒絶される。

λαμβάνω — 把握、つかむ、所有しようとしたとたん、愛が消える

以上に挙げたのは、手元のレジュメに残る無数のメモのほんの一部である。レジュメを見ながら、自分の教父文学

の理解がいかに宮本先生の授業で聞いた話に影響されているかを改めて認識している。

その後、ギリシア、ラテン教父の世界からはやや離れて、より東方のシリア語文献の研究を主に行っている。この原稿の依頼を受けて、なぜかシリア人エフレムの『楽園賛歌』の冒頭部分を思い浮かべた。あまり脈絡はないのだが、やや無理やりに理由付けをすると、宮本先生の魅力の一つであるその巧みな語り口（これまでにその話術でしばしば丸め込まれてきた気がしないでもない）と、シリア語教父文学を代表するエフレムの語りの間に何か共通するものを感じるからである。また、宮本先生の授業で学んだもっとも重要なことの一つに教父たちによる聖書の比喩的解釈の面白さと奥深さがある。エフレムが聖書解釈の手法について語っている箇所の一つとして、『楽園賛歌』冒頭部分の試訳を記してやや無理やりに稿を閉じさせていただく。

エフレム『楽園について』第一歌[1]（一～五）

その天上的な書物で万人を導くモーセ、
ヘブライ人たちの師であるモーセは、
啓示の宝庫である律法の書によって私たちに教えた。
そこではかの園にかかわる事々が顕にされる。
園は目に見えるものをとおして記され、
目に見えぬものをとおして讃えられ、
手短に語られ、その木々がゆえに驚きを与える。

畏れと愛との間に私は立った。
楽園の愛が、それを探索するよう私を誘い、
その偉大さに対する畏れがそれを探ることを禁じていた。
私は賢さをもって両者を和解させた。
私は楽園の秘められた事柄を敬い、顕にされた事柄に思いを巡らした。
利益を求めて探索し、助けを得るために口を閉ざした。

私は悦びのうちに楽園の物語と出会った、
読むには短いが、探るに豊かな物語と。
私の舌はその話の顕な部分を読み上げ、
私の知性は畏れのうちに飛び巡り、
楽園の栄光を探った。あるがままにではなく、

人間が捉えることができるかぎりにおいて。

私は心の目で楽園を眺めた。
すべての山々の頂はその頂より下にあり、
かの洪水の波頭もその麓に届いたのみである。
洪水は楽園の足に口づけして、崇めた後に、来た道を
　戻り、
（再び）上昇して、山々の頂を足下に置いた。
洪水は楽園の踵には口づけし、山々は打ちのめした。

その高さにかかわらず、楽園へと登る者が疲れること
　はなかった。
楽園を相続する者たちにはそこに労苦はないからであ
　る。
楽園はその美しさで登攀者を喜びのうち引き寄せる。
楽園は栄えある輝きに満ち、芳しく匂う。
栄光に満ちた雲は、ふさわしい者たちの幕屋となる。

註

（1）Des heiligen Ephraem des Syrers Hymnen De paradiso und Contra Julianum, herausgegeben von Edmund Beck (CSCO 174, syr. 78), Louvain: Secrétariat du CorpusSCO, 1957, S. 1–2.